小学校３年特別の教科　道徳

「あの子だから」（全１時間）

授業者　阿保　裕也

実践のポイント

本授業では，内容項目Ｃ－（12）「公正、公平、社会正義」に関わる授業を行いました。

主人公への自我関与を求める中心発問を通して，分け隔てなく公正，公平な態度で接することの大切さと難しさに気付くこと，本授業で取り扱った道徳的な課題を自クラスで起きないようにするためにどのようなことができるのかを考える活動を通して，自分のこれからのよりよい生活や生き方について考えることができるのではないかと考えました。

授業のねらいと展開

本単元のねらいは，「登場人物の言動や心情，これからの生き方ついて考え，話し合うことを通して，分け隔てなく関わることの難しさや大切さに気付き，これからの生活で活かし，よりよく生きようとする心情を育む。」です。これを実現するために以下の二点を重視しました。

○　分け隔てなく接することの難しさや大切さについて考えることができるよう，主人公への自我関与を求める中心発問を行う。

本授業の主発問として，「もし，自分が主人公なら，どのように行動するのか」を問う発問をしました。そうすることで，現時点での自分の道徳的価値観と照らし合わせた子供たちの考えが表出してきます。加えて，その出てきた考えの理由を問い返したり，資料の中での登場人物のやり取りを想起させることで，よりよい道徳的価値に近づいていったり，価値に向かうことの難しさに気がつくことができます。

○　これからの自分の生活について自分事として考えることができるよう，本授業で取り扱った資料の中での課題を自クラスで起きないためにどうするかを考える発問を行う。

本授業の後半では，資料内で挙げられて課題について「自分たちのクラスで起きないようにするためにはどうしたらよいか」を考える発問をしました。することで，学習したことを活かしながら，自分たちの実生活ではどうしていったらよいのかを自分事として捉え，真剣に考え，話し合うことができると考えました。

実践のここに注目！

視点１：資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

○　子供たちの実態や教師の「目指す子供の姿」に合わせて，道徳の授業を配置したり，一単位時間の授業を構想したりする。

特別の教科道徳においては，一単位時間で学びの文脈を考えるというよりは，教育活動全体に適切に道徳の授業を配置することで，子供たちの思いや願い，経験が授業とつながったり，教師が目指す資質・能力を身につけた子供の姿が実現できたりすると考えます。

本授業におきましても，読み聞かせなどの行事や関連する内容項目の授業を意識しながら，授業の配置や授業作りを行っていきました。

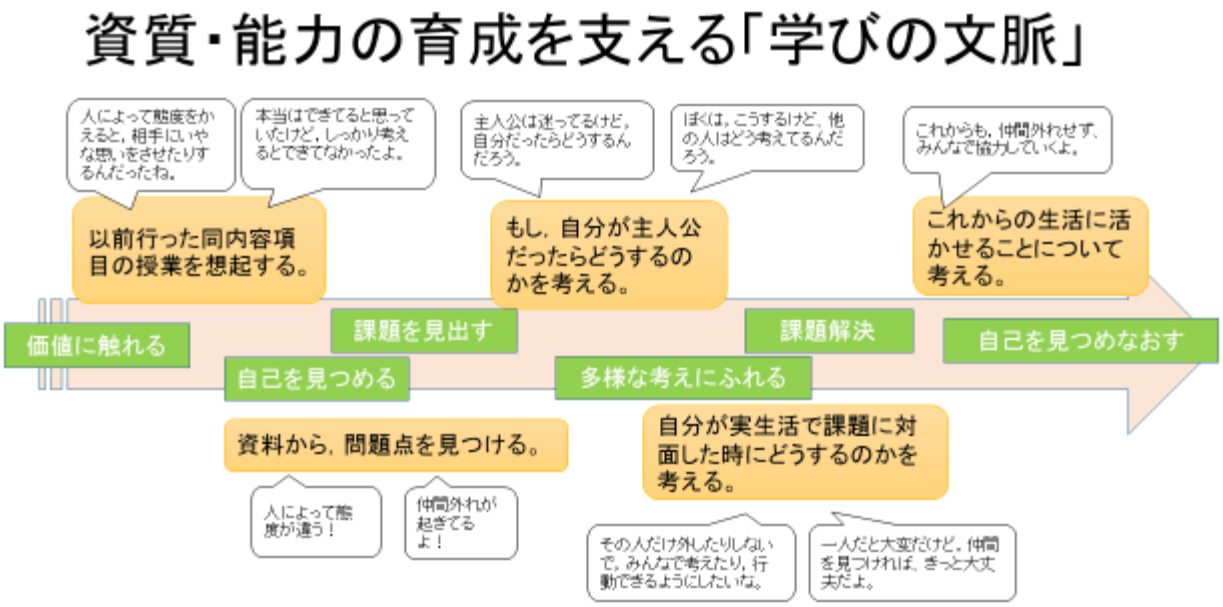


図１　本実践における「学びの文脈」のイメージ

一単位時間で考えた際には，図１のように，

・価値に触れる　　⇒学ぶ価値についてつかみ，学習の見通しをもつ
・自己を見つめなおす⇒学ぶ道徳的価値についての現時点での自己を自覚する
・課題を見出す　　⇒解決すべき課題を捉える
・多様な考えにふれる⇒解決する方法やどうしてその方法を選んだのかを伝え合う
・課題解決　　⇒実生活においてどのように課題解決を行っていくのかを考える
・自己を見つめなおす⇒授業で学んだことをもとに，道徳的価値について自分の考えを再度見つめなおす

という過程を経ることで，道徳の見方・考え方を働かせながら，道徳の学習プロセスを学び，少しずつですが，自分たちで学びを展開できるようになってきました。

本時のねらいや内容項目，児童の実態によって授業構成が変わるため、順序性はないと考える。

視点２：主体的・対話的で深い学びを保障する手立て

【手立て１】　自分事として考えられる課題・発問の工夫

子供が課題を解決していく必要感や必然性を感じながら，課題を追究していくことができるよう，課題作りや発問の工夫を行いました。

課題については，以前行った同内容項目の授業を想起させることで，その際に抱いていた問題意識を喚起すること，また，資料を通して問題点を見出すことを関連づけることで，自分たちの課題と資料の課題が結びつき，子供たちが「学びの価値」に気付くことができるようにしました。

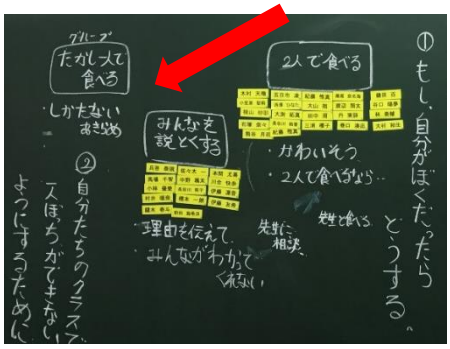
また，学習の中で子供たちの対話の中で生まれた問いを発問として投げかけたり，実生活に立ち戻った時を想定した発問を投げかけたりすることで，自分事として考えることができました。

【手立て２】　立場の明確化で対話の活性化を図る

主発問については，子供たちから出された複数の意見から自分の考えに近い立場を選択し，黒板にネームプレートを貼ることで，視覚化を図りました。立場を明確化させることで，自分の考えをしっかりと持つことができるとともに，自分とは違う考えも知りたいという気持ちを高めました。また，同じ立場でも根拠が異なることもあるため，多様な考えにふれることができました。

自分と資料との対話の中で，道徳的な価値についての自分の考えを自覚化し，自分とクラスメイトとの対話で，道徳的な価値についての多様性を広げていきました。

本時では，はじめは「２人で食べる」と言っていた児童が，「みんなを説得した方がいい」という意見を聞いて，「そっちのほうがいいね」「難しいと思うけど，理由も伝えてわかってもらえるまで説得する」とネームプレートを動かし，考えが変容する児童もいました。



本時の板書の一部

【手立て３】　効率的な授業の振り返りのための ICT 活用

本時では，以前行った同内容項目の授業の板書を記録していたものを掲示し，授業の様子を振り返りました。子供たちは授業の様子を思い出しながら，「相手によって態度を変えると相手にいやな思いをさせることがあった」「本当はできていると思っていたけど，しっかり考えるとできてなかったことに気付いた」と学ぶ価値についてつかんだり，その際に抱いていた問題意識をもつことができたりしていました。

掲示・配付した板書

板書を記録したものを後日配付することで，ワークシートへの記入の時間を短縮し，対話の時間を確保することができます。また，授業後には，自分たちの考えがまとめてある板書を配付し，手元にあることで自らの考えの変容を知ることができ，学習への意欲を高めることができました。

授業者からのコメント

教師が問わなくても進む授業を目指して

教材を提示する，そうすると，「ここがまずいよね」「ここがだめじゃないかな」と問題点を見つけていく。「〇〇はいやだったんじゃないかな」と登場人物の心情を読み取っていく，「自分も△□と同じことするかもな」と登場人物に自分を重ねて考え始める。「もっとこうしたらいいんじゃないかな」「〇〇はこうすべきだったんだよ」「こういうことにならないために〇〇していかないとね」と問題を解決していく。子供たちと道徳の授業を通して，道徳の授業の学び方を共に学んでいくことで，見通しをもってより主体的に学ぶ子供たちを育成していくことができるのではないかと考えます。

また，道徳の学習を繰り返す中で，多様な考えを交流し，対話するよさ，学び合うよさを多く経験することで，自分たちで対話を求めていく子供に育っていくのではないかと考えます。そのきっかけを作るために対話を生み出す工夫や場の設定が必要になってきます。

教師が問わなくても，課題を見つけ，解決方法やよりよい過ごし方を議論し合い，自分の生き方を振り返られるようになるのが理想かもしれません。しかし，わかっていてもできない弱さや大変さもあります。そこを教師が問うたり，問い返しをしたりしていくことで，よりリアルに，ねらいにせまった授業になっていくのではないかと考えます。

明確な指導観をもった授業作り

道徳の授業作りを進めるにあたって，「明確な指導観（価値観，児童観，教材観）をしっかりともって授業作りに臨むこと」が主体的・対話的な深い学びにつながる第一歩であると考えます。それ以前に，それぞれの指導観についての理解を深めていくことがより深い学びに迫っていけるのではないかと考えます。

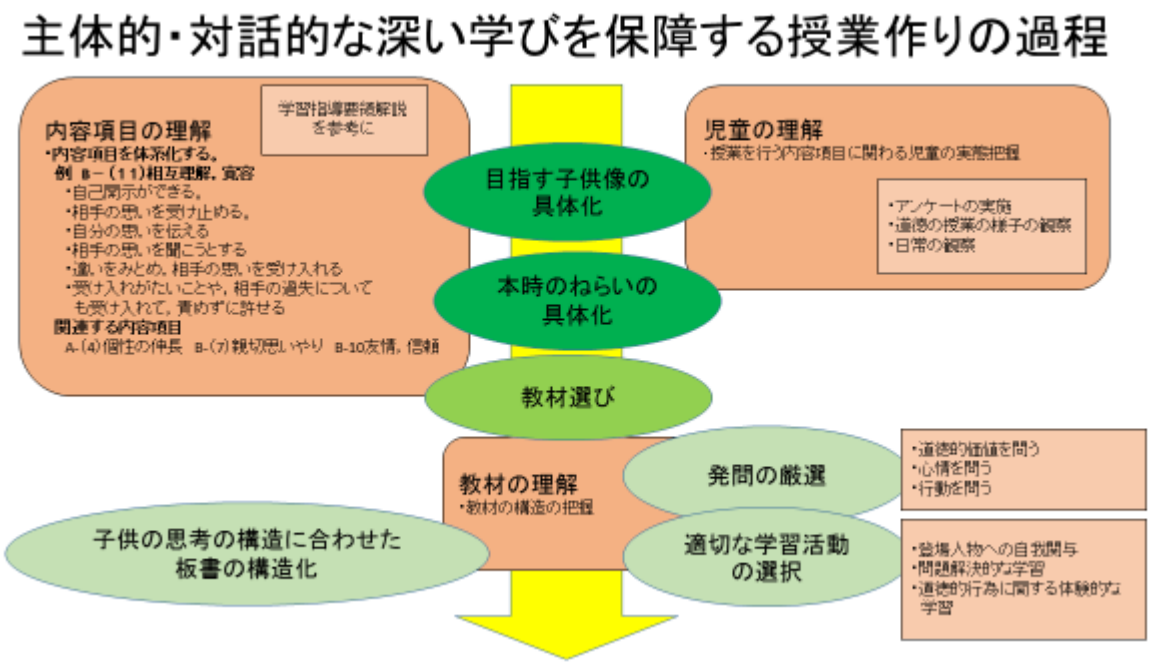


図２　特別の教科道徳の授業作りのプロセスイメージ

まず，「内容項目の理解」「児童理解」を深めていきます。

「内容項目の理解」

授業を行う内容項目の段階性や関連する内容項目を把握し，中学年で学ぶべきことは・・・，３年生では・・・，本時では・・・とより具体化していきます。

「児童理解」

授業を行う内容項目に関わる児童理解は，非常に重要です。アンケートの実施や道徳の授業の様子の観察，日常の観察を通して理解を深めていきます。

これらを深めていくことで，その授業で目指すべき子供の姿やねらいが明確になってきます。そして，目指す姿やねらいを達成するために，教材を選んでいきます。

「教材の理解」

教材の場面や登場人物の心の動きや問題点などを整理し，教材を構造化していきます。子供たちがどのようにこの教材をとらえるのかというのも大切です。その構造に合わせた，発問や学習活動，板書などを考えていきます。

教師が，「これを学ばせたい」「これに気付いてほしい」と願いをもって授業作りを行っていきますが，教材が児童の実態にあっていなかったり，発問が教材の構造とあっていなかったりするとなかなかねらいに迫ることが難しくなります。

指導観の明確化と理解を深めていき，ねらいに合わせた発問，学習活動，適切な問い返しを行っていくことで，主体的・対話的な深い学びの実現に近づいていくのではないでしょうか。